

特別講演 2

「CKDと高尿酸血症の最前線 ～目まぐるしく変わる考え方～」

帝京大学医学部 内科教授

内田 俊也 先生

CKDの危険因子としては蛋白尿、高血圧を中心に新しい予測因子の研究が積極的になされている。高尿酸血症はその一つであるが、腎機能低下に伴う尿酸値上昇はほぼ必発のものとして捉えられてきたため、厳格な介入試験による結論はいまだ十分でない。しかし最近の疫学研究では、高尿酸血症と心血管事故、あるいは高尿酸血症と腎機能低下との関連を示唆する結果が多数認められる。高尿酸血症と同様に高カリウム血症、代謝性アシドーシスなど従来はCKDの結果と考えられてきたものがCKDの進行因子であるという因果の逆転もいくつかみられるようになってきている。

最近われわれはCKDの高尿酸血症の代償機転として腸管からの尿酸分泌が大きな役割を演じている可能性を動物実験で示した。これは痛風患者でみられるABCG2遺伝子の変異が腸管分泌を抑制して尿酸の腎負荷が増えること類似している。CKDに合併する高尿酸血症の治療薬として新しいキサンチンオキシダーゼ阻害薬の有用性が期待されている。本講演では、CKDに合併する高尿酸血症の病態と治療戦略について最新の情報を提供したい。